Column New Med

医療ジャーナリスト
和田 努

1936年広島県生まれ。早稲田大学卒業。NHK入局、ディレクター、プロデューサーとして主に医療問題を扱った番組を制作。72年退職。医療関連著書多数。

〝医療否定本〟の副作用に要注意!!
―極論に内包する野蛮とは―

世の中には〝極論〟が、まかり通ることがある。あらゆる事柄には、多面的要素が含まれる。

そのことを「両義的存在」ということがある。例えば、人間とは「善をなす可能性と悪をなす可能性とを同時にそなえている」という考え方で人間を見つめるということが大切なのではあるまいか。

「人間が善をなすか、悪をなすか、人間の自由な選択であること、その自由が善の選択に向かうことに自分を賭けること、そして、こうした選択をなすであろう人間に自分は最後の信頼を寄せることであった」――というのは、『世界』（岩波書店発行）の初代編集長をつとめ、思想家でもあった吉野源三郎氏であった。

ふたたび〝極論〟を考えると、両義的存在の一面を切り捨て、片面だけを強調することをいう。こうした思考は、《野蛮》といわれても仕方があるまい。知的営為とおよそ対極にあるからだ。

年中無休の外来診療と365日24時間体制での在宅診療、在宅ホスピスを実践する診療所を兵庫県尼崎市で開業している長尾クリニック院長の長尾和宏医師は、『〝医療否定本〟に殺されないための48の真実』（扶桑社刊）という本を最近上梓された。この本では、〝医療否定本〟の著者を特定していないが、『患者よ、がんと闘うな』『がん放置療法のすすめ』『抗がん剤は効かない』などと、〝医療否定本〟をあげているので、あの有名な近藤 誠氏であることは、言うまでもない。

長尾医師は、次のように書いている。

「注目を集めている〝医療否定本〟の多くは、あまりに極論であり、誰にでもあてはまる話ではありません。むしろ、当てはまらない人のほうが多いように思います。そのため、本の〝副作用〟ともいえる、負の影響が大きく出ているのです」。

医療を否定するような本の負の影響を懸念して、本をお出しになったことは、歓迎すべきことと思う。

長尾医師は、こうも述べている。

「まだ若くて、助かる範囲にある早期がんなのに、〝医療否定本〟の教えをまともに受けて治療を拒否する患者さんに多く出会います。目新しさから本が売れて、放置療法ということばが独り歩きしてしまい、時に人の命を不要に奪っている。医者の書いた本の影響でせっかく助かる命が亡くなるなど、本来あってはならないと思います」。

近藤氏は、「血圧もコレステロールも下げる必要はない」と、大胆（？）にも言い放っている。「放置療法」と言っているが、放置するということは、療法ではありえないわけで、「放置」に「療法」を、くっつける怪しげな言語感覚を押し付けてほしくない。

現在、わが国では、年間120万人が亡くなっている。そのうち、がんが原因で亡くなったのはおよそ36万人。3人に1人はがん死である。欧米諸国では、近年がんに罹る人も死亡する人も減少傾向にある。ところが日本は罹患率、死亡率も右肩あがりで増えている。これはがん検診の受診率が欧米に比べてかなり低いことが要因の1つである。がんの検診率を高めて、早期発見・早期治療を行い、医療者も患者も、がんを減らす努力をしなくてはならない。

乳がんの患者団体の代表者に聞いた話だが、乳がんと診断されて、手術を勧められたのだが、できることなら手術をしたくないと思う。若い患者ほどその思いは強い。乳房を失うのは、女性としては想像以上につらいことにちがいない。仮に「がんの手術の多くは無駄」と、主張する近藤氏に診察を受け、「手術は必要がない」と、いわれたとする。手術したくない患者にとって、救いの声に聞こえるのかもしれない。そのまま放置する。前出の長尾医師の著書に述べられているように、「医療拒否本」の誤った極論に導かれて、手術を含め、適切な治療をしないで、病状を悪化させ、命を失うかもしれない人には、気の毒としか言いようがない。

《早期発見・早期治療で助かったがんは、がんではなく、『がんもどき』だ。本物のがんなら、どんなに早期に発見してもとっくに転移している》と、近藤氏は主張しているが、これも極論だろう。早期発見・早期治療で完治している患者も多い。近藤理論を敢えて〝極論〟といったが、極論の中にも多くの真実が含まれていることは承知している。要は全て医師に誘導されるのではなく、患者と医師の相互参加こそ尊重されるべきだろう。